

令和5年電気学会全国大会特別講演（実行委員会企画）について

講演者名 来田 享子（らいた きょうこ）
〔博士（体育学）〕

所属 中京大学大学院 スポーツ科学研究科 教授



プロフィール

1988年 神戸大学大学院教育学研究科卒業。2000年 博士（体育学）の学位を中京大学にて取得。現在、中京大学大学院スポーツ科学研究科 教授。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では組織委員会理事を務めるとともに、2021年には国際オリンピック史家協会から日本人としては初めてヴィケラス賞を受賞。

特別講演（実行委員会企画） 演題「スポーツを通じた社会の持続可能性への挑戦」

国際的なスポーツイベントは、スポーツを通して「感動」「勇気」などの一時的、感情的な影響を与えるものに留まらない。東京2020大会では、ダイバーシティ&インクルージョン、組織運営の透明性の確保など、様々な課題が浮き彫りになった。一方、これまで国内ではあまり議論されてこなかった問題の一つに、イベントの規模に比して自然環境に与えるリスクが高まることへの対応がある。愛知県は、愛知一中（現、旭丘高校）出身で日本におけるマラソン指導の始祖とされる日比野寛、初期の女子オリンピック選手である前畑秀子や渡邊すみ子の他、近年では安藤美姫、浅田真央、宇野昌磨ら、フィギュアスケート選手等を輩出した地域である。この地を舞台に、2026年にはアジア競技大会・アジアパラ競技大会の開催が予定されている。講演では、国際オリンピック委員会（IOC）による持続可能性戦略等を紹介し、愛知・名古屋で開催される国際的なスポーツイベントを通して、社会の持続可能性を考える議論に資する話題提供をめざしたい。

最近の著作（主著）：

- 「新冷戦時代の平和構築にオリンピック・パラリンピックはどう向き合うか」, 体育の科学 (2023年)
- 「オリンピックとジェンダー-女性の参画をめぐる歴史と平等に向けた政策の課題-」, 体育の科学 (2022年)
- 「スポーツにおけるジェンダー平等の観点からの公平・公正の歴史」, ジェンダーと法 (2022年)
- 「人権拡大の観点から考えるオリンピック・ムーブメントの意義と課題」, 陸上競技学会誌 (2022年)
- 「IOC ジェンダー平等とインクルージョン目標 2021-2024」, スポーツとジェンダー研究 (2022年)
- 「スポーツ・ジェンダー学からみた政策専門領域への期待」, 体育・スポーツ政策論叢 (2022年)
- 「Inclusive であるべき五輪の今とジェンダー」, 日本スポーツ法学会年報 (2021年)
- 「The Museum Where You Can Meet the Olympic Story」, Journal of Olympic History (2021年)
- 「The Road to a Difficult Olympics: One way or another, the Games will have to address gender equality themes」, Discuss Japan-Japan Foreign Policy Forum (2021年), 他多数